22J-am02S

開放性隅角緑内障患者に対する薬剤師の適切な指導及びアドヒアランス向上のためツール開発

○南里 侑美[1], 水谷 怜子[1], 谷 雅子[1], 形部 宏文[1], 木村 康浩[1], 二五田 基文[1], 新井 茂昭[1]（[1]安田女大薬）

【目的】現在、緑内障は失明原因の第一位であるにもかかわらず、1 年継続率は60％と報告されている。特に Latanoprost(UKGTS)無作為化・プラセボ対照試験によると、開放隅角緑内障には、Latanoprost 群はプラセボ群と比較して視野保持を改善し、有意に眼圧下降したと報告されている。そのため緑内障治療の点眼アドヒアランスが患者の視野機能予後を左右すると考えられる。また、緑内障における患者教育が眼圧下降とその持続に及ぼす効果として、病院で医師による治療の指導はベースラインと比較し 1.2±1.8mmHg 下降させ、さらに医師と看護師による指導により、2.0±1.9mmHg と下降した結果も報告されている。しかし、実際点眼薬を投与する薬剤師が定期的な介入指導によってアドヒアランスを向上させたという報告はあまりされていない。そこで、実際の臨床現場での使用を目的とした効果的な指導ツールの開発を検討する。

【方法】平成３０年９月～１０月において、広島市安佐北区・安佐南区内の眼科門前薬局６店舗に、点眼指導の現状、ツール原案に関する意見についてアンケート調査し（匿名による)、回答の集計を行った。

【結果・考察】薬剤師総回答数は３５であった。服薬指導等の現状に関する調査では、緑内障患者に対し約７割の薬剤師が点眼指導や情報提供が不十分と回答していた。点眼状況の確認は、残薬により確認できているものの、眼圧での評価は困難との回答があった。また口頭による情報提供・服薬指導が主であったが、専用のパンフレットなどがあると望ましいとの回答は約９割（複数回答）となり、今回作成したチェックリスト・情報提供書の使用方法を精査し、検討することで、薬剤師の介入により点眼アドヒアランスの向上に寄与できると考えられた。